

三春実生プロジェクトとOSSL線量計 による学童の長期放射線モニター

東北大学理学研究科 小池武志

私はこれまで原子核物理の分野で基礎研究に携わり、自身の研究と社会との関わりについて考える事は殆どなかった。しかし、原子核物理と言っても研究分野は多岐にわたり、特に基礎研究に従事していると、原子力発電のような応用的分野と接する機会が皆無で、そうかと言って積極的にそのような機会を求める必然性も感じていなかった。つまりは、原子力発電の基本原理の理解と知識以外は何も知らない素人同然であった(今でもそう変わりはない)。ましてや、その存在の社会的な意味や危険性・安全性について考える事は更に稀であった。

このような一介の研究者が何故、ここで紹介する三春町における子供たちの放射線モニターに関わることになったのか? 2011年3月11日の震災、それに続く原発事故発生においても、仙台での自身身辺の対応に手一杯で、職場にあった検出器も、停電と滅茶苦茶になった実験室にうもれて使えないにはならなかった。事情が一変したのは、郷里に帰省し再び仙台に戻ってからである。途中、福島市内の土を採取し、大学に持ち帰り、使用可能となったゲルマニウム検出器を動

かして、福島で起こっている事態を目の当たりにした。3月27日の事である。遊び盛りの男児2人の親として考えずにはいられなかったのは、自分の子供がもし同じ条件におかれていたらどうするのかという問いであった。この問いとこれまでの自分の無関心さへの反省とが、その後、同僚の熱意と努力、教知れぬ人々の善意と、多くの幸運な偶然とが繋がって、三春「実生」プロジェクトとして、一つの形になったと思う。三春町での取り組みに至るまでの詳細に興味をお持ちの読者は、文末の参考文献を参照されたい。以後、三春「実生」プロジェクトの基本理念について述べる。

「実生」プロジェクトは、紆余曲折を経て、6月20日に三春町役場で正式に発足した。私の職場の有志が素案を三春町に持ちかけてから、僅か一カ月半の事である。もっと早く出来なかったのかと思われるかも知れないが、その当時を思えば驚異的な迅速さである。放射能汚染による差別や風評被害が日本のみならず、世界にも拡大しており、被ばく量の測定値、特に子供の被ばく量の個人情報をどのように管理するかは大きな問題であった。また、被ばく量をモニターすると言っても県や国からの資金的援助を待っている余裕もない。更には、研究機関や医療機関内での放射線管理区域内でのモニターは法律で制度化されていても、今回の事故のように一般大衆を目的とした管理区域外の被ばく線量モニターの制度やシステムが無いという困難があった。ところがこれらの困難

特集 3.11と向き合う 転換点に立つ

は短期間で見事なまでに解決され、7月13日には三春町の小・中学生1400人余に、OSL線量計と言われる個人線量計が配布された。夏休み直前の事である。何故可能であったか？「実生」プロジェクトの「住民による直接参加の草の根の活動」という基本理念にあると考える。

アメリカの思想家、Henry David Thoreauは、有名な随筆「市民的不服従(civil disobedience)」の中で「従うべきは個人の良心であり、その良心に則って不当だと思われる法律や権力には従わなくても良い」と唱えた。今回の場合はその逆で、そこに生活する住民が子供たちの健康を考え、緊急時に法律や制度に縛られることなく必要だと判断した行動を町ぐるみで起こしたという、私が直接体験する初めての、地方自治体主導の草の根の活動である。

町は「実生」プロジェクトを町が運営する任意団体として立ち上げる選択をした。これは、役場職員がプロジェクトの業務に安定的かつ長期的に関わる事ができ、人件費や事務所賃貸等のNPO運営費用や、設立時の法律的な手間を払拭できる。さらに、被ばく線量等の個人情報には三春町が責任を持つて長期的に管理・保存することで、町民(特に児童の親)の信頼と理解を得るに至った。その上で、町の教育委員会は義務教育にある児童の保護者に、町内各地区の学校を通じて、線量計の一方的な配布ではなく希望を募る形をとった。並行

して、OSL線量計を読みだすための機械の購入の予算を町議会が決定し、役場職員が読み出しを行い、結果の報告書作成等も全て町が引き受ける体制が整えられた。こうして、個人被ばく量モニターに関するほぼ全てを町が独自に行えるようになったのである。最初の読み出しは、夏休み明けの8月末から9月初めに行われ、以後2回の読み出しが行われた。被ばく量の測定は、義務教育の就学期間を通して行われる予定である(最大9年間)。現在の最大の懸案はこれまでの測定結果を今後どう生かして行くかであり、現在模索中である。これはおそらく誰もが抱えている問いであり、これから長い目で向き合っていかなければならないのが現実だと思う。しかし、自ら考えて行動を起こした三春町の事故対応への柔軟さと想像力は、線量計以上に大切な「自治の精神の種」を子供達の心に蒔いたのではないだろうか。

参考資料

- 1 長瀬ランタウア社NF日より2011年12月号 トップコラム <http://www.nagase-landauer.co.jp/nl/letter/index.html>
- 2 とむちのこのコラム集 福島県三春町「実生」プロジェクト <http://blog.livedoor.jp/tomsatotechnology/archives/51808843.html>
- 3 三春町ホームページ http://www.town.miharu.fukushima.jp/06enc/06saigai/03_0101/misyoproject.htm
- 4 実生プロジェクトホームページ Fukushima-misho.com